〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ　25

# 国宝　円文螺鈿鏡鞍の杏葉形宝珠透文鉄轡

日本風俗史学会会員
前青梅市文化財保護審議会会長　齋藤慎一

円文螺鈿鞍は、大和鞍として居木幅広く、海・磯の較差、前輪の肩の張った山形、後輪腰のふくらみに中世初期の重厚な造形が指摘される軍陣所用の鞍です。（『日本馬具大鑑3』）

舌長鐙等付属具も下鞍（鞦）以外は、ほぼ残存し、皆具に近い稀有な遺例です。重厚さは、付属の杏葉形宝珠透文鉄轡にも指摘できます。

この轡（銜）は、年代的には、鎌倉後期に下降すると考えますが、中世轡の基本意匠である杏葉形をきちんと踏襲し、鍛造の仕様、太めの法量、角ばった断面に古様式の重厚さが残ります。制作年は下降しても中世の様式がのこる過渡的造形として貴重な中世轡と思います。

さて轡は、馬の頭に結びつけた面懸の面連から左右に垂れた大紐を轡の鏡板の頂辺（宝珠文の先）から立ち上がった立聞の上端の鐶（壺）に通し四方手に結び、近世になると房助という紐を介して結んで装着します。この轡にも紅花染唐打の付房の房助が付属しますが、撚糸製でこの鞍のものではありません。一方轡の喰は馬の口に喰（か）ませます。喰部分は馬の口腔・舌の動きになじむように、二本の鉄棒を各々の鐶で接続、そこを組違といい多少の遊（自由さ）のある構造です。

組違の鐶でつながる左右二本の喰の端は大きな喰先の鐶で、鏡板の宝珠を三つ重ねた形（三盛）の下の二つの宝珠の間の二条の合体する竪の輪郭に、堅固に、ゆったりした遊び（余裕）を以って接続します。その喰先の鐶に、大きな遊鐶（搦輪）が取りつき、その遊鐶に、引手（水付）の金具の鐶（壺）がつきます。左右の引手先の末端にある手綱付壺の鐶に、手綱の左右の端が結びつけられるのです。

轡は騎手の手綱捌きで、鐙は騎手の両足の働きで、馬を制禦するための道具です。騎射を主とする中世武士にとって功名手柄、死命を賭して人馬一体となるための大事な武具です。円鐶を介しての遊びのある接続法・法量など、微妙な工夫があったと考えられます。

朝廷の牧場の多かった武蔵国では馬具の製作も行われ、古く『伊勢物語』（十三段）に武蔵鐙の名称がみえ、山上八郎先生のご示教では、多分舌長鐙などに相当するだろうとのことでした。多摩の中古・中世の日野・落川遺跡（多摩川流域の日野市・多摩市）では、馬具の鍛造が行われたことも報告されています。

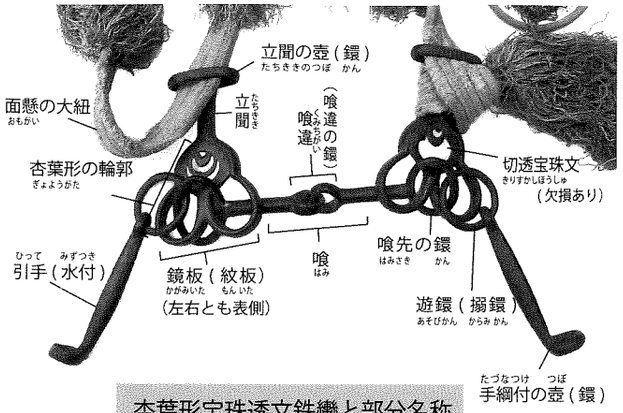
面懸を結ぶ立聞と喰と、手綱のつく引手とを接続するのは鏡板（紋板）です。立聞と紋板は古くは別造で、小鏡という部分で割込矧とし鋲を打ち接続しましたが、御嶽のは共造です。共造の立聞と鏡板で長134㎜、立聞長52㎜・幅14㎜～12㎜・厚8.5㎜～12㎜、鏡板の長82㎜・幅87㎜・厚11.5㎜～10㎜で立聞の断面は厚く長方形です。立聞の壺も大きく、角ばって長方形で古様。外側で長辺61㎜・短辺27㎜・高9.5㎜で、側面に近世に定式化する切目がないのも古様です。『集古十種』馬具部には、御嶽の鞍鐙と面懸と轡を載せますが、誤って切目を描いてます。

御嶽の轡の共造の立聞は、後世のような小鏡の円形はつくらず、幅もかわらず、ただ表側のみに二条線を刻みます。過渡期で、擬制的にその部分を示したのです。御嶽の轡は、小鏡形出現以前の古様を示すと思います。

さらに鏡板を杏葉形の輪郭と








杏葉形宝珠透文鉄轡と部分名称

向って右の立聞の壺に通した大紐は四方手結び。
左右の鏡板は表側を外向きにする。

重要文化財、延文六年（一三六一）造立の六面幢の諸天の背景の七宝の図に描かれます。南北朝時代には普及していた信仰的な文様と考えます。

公家の移鞍に所用の杏葉轡が、武士の戦陣にも専ら用いられた様子は、鎌倉中期の『宇治物語絵巻』、ついで正応六年（一二九三）成立で写実性の高い『蒙古襲来絵詞』、下っては貞和三年（一三四七）の『後三年合戦絵詞』に描写されます。しかし、武家の軍陣所用の大和鞍に付属する伝世品の例は、この御嶽神社の例が唯一なのです。

伝統的な鏡轡を引両の透彫にした例が『後三年合戦絵詞』に描かれます。杏葉轡の変形の志向もこの頃で、私の考えでは鎌倉後期と想定します。宝珠文は、中世には、連銭文と呼ばれた円文の鞍にふさわしい。杏葉形の輪郭という中古以来の古典的意匠を、中世流行の三盛の輪郭意匠に、中に配すべき杏葉文を現世的な富貴の如意宝珠文に変えたところに、新しい武家の志向を印象します。さらに下に重なる二つ分の空間に宝珠を配さなかったのは、喰先の大きな鐶の自在な遊を考慮した実用性が想定できます。

喰は各々の長114㎜～117㎜、中ほど最も太く12.5㎜で古様。喰違の鐶外径3㎜～2.8㎜、総長は220㎜。鏡板に組みあう喰先の鐶は同じく長径60㎜・短径41㎜で、遊鐶は長径49㎜・短径47㎜と大きい。引手は総長117㎜、中ほどは鉈豆状にうちひろめ断面角ばり、厚8㎜・最大幅15㎜で太く形状は古様。遊鐶にとりつく引手の鐶は長径22㎜・短径20㎜、厚7～9㎜。手綱付の壺の鐶は径2.8㎜～2.6㎜。引手や喰の法量・形状には、中世の古様が濃厚で東京国立博物館蔵で重要美術品の『銅造鍍銀杏葉轡』と共通する様式があります。

奈良の手向山八幡宮、栃木の二荒山神社などの古社に公家所用の神事の移鞍に付属する指定文化財の杏葉轡には伝存例があります。しかし前記したように、武家所用の軍陣用の大和鞍に付属して伝存する中世の杏葉形鉄轡の例は皆無です。この武蔵御嶽神社が唯一無二の伝存遺例です。絵巻物には豊富に描かれながら、実遺例はないのです。

変形杏葉轡ではあっても大変に貴重です。またそれが中世の変形杏葉轡としても唯一例なのですから一層貴重と思います。

馬具の調査は長期にわたりました。年代設定をこころみた旧師 山上八郎先生や恩師の山岸素夫先生と同行の折も得ました。このたびは、同じ山岸先生門下で西岡文夫氏・寺本 靖氏、また古馬具の実際に精通した菅野茂雄氏にご助力を頂きました。